

樹冠表層摘果による早生温州「興津早生」の浮皮・日焼け果軽減による商品化率向上

「興津早生」の粗摘果時に樹冠表層部の果実を摘果すると、果実品質や着色にはほとんど影響せず、浮皮や日焼け果の発生が少ない。

農業研究センター果樹研究所常緑果樹研究室(担当者:北園邦弥)

研究のねらい

気候温暖化に伴い、カンキツでは生育が早まり熟期の前進が図られるが、反面、秋期の高温や多雨により、温州ミカンにおいては成熟期以降の新梢・新根の発生、着色遅延、浮皮の発生など品質の低下と次年の着果減少が引き起こされている。

そこで、摘果方法の改善により、果実の浮皮や日焼け等の発生を軽減し、商品化率の向上を図る。

研究成果

1. 樹冠表層摘果は、慣行摘果に比べて浮皮の発生が少なく(表1)、また、日焼け果の発生も少なく、程度は軽い(図1)。
2. 果実の着色や果皮色、果実品質は、慣行摘果とほとんど変わらない(表2)。
3. 以上のことから、樹冠表層部の果実を摘果することにより、慣行摘果に比べると浮皮や日焼け果発生を軽減できる。

普及上の留意点

1. 樹冠表層の摘果は、6月下旬から7月上旬にかけて行うが、慣行の摘果に比べるとやや小玉になりやすいため、気象条件や果実の肥大状況等を考慮しながら、9月以降小玉果を中心に仕上げ摘果を実施する必要がある。

表1 摘果方法の違いが「興津早生」の着果部位別浮皮発生に及ぼす影響

年次	処理区	着果部位別の浮皮発生指数				
		上部	中部	下部	内部	樹平均
2005年	表層摘果	3.5	5.1	3.0	0.5	3.0
	慣行摘果	10.1	25.3	13.6	5.1	13.5
2006年	表層摘果	-	2.5	4.2	0	2.7
	慣行摘果	-	20.3	20.3	0	16.3

注1) 粗摘果：2005年6月29日～7月3日、2006年7月9日

仕上げ摘果：2005年9月16～17日、10月16日、2006年9月30日、10月16日

2) 2005年は11月14日収穫、18日調査、2006年は11月13日収穫、15日調査

3) 浮皮発生指数 = $\frac{\text{軽} \times 1 + \text{中} \times 2 + \text{甚} \times 3}{\text{調査果数} \times 3} \times 100$

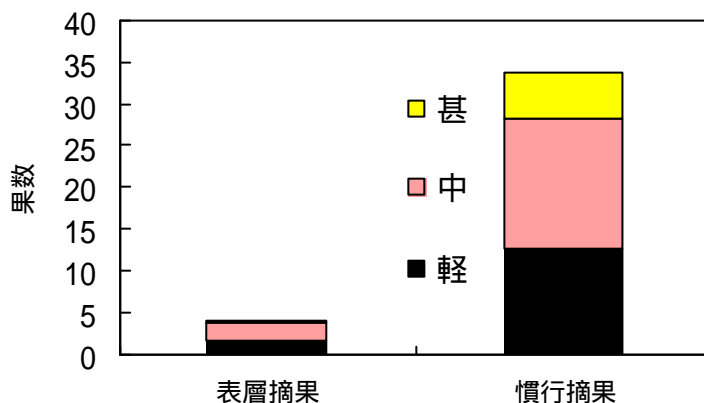


図1 摘果方法の違いが日焼け果の発生に及ぼす影響 (2005年)

表2 摘果方法の違いが「興津早生」の着色、果実品質に及ぼす影響

年次	処理区	着色程度	果皮色(ハンター値)		糖度 (Brix)	クエン酸 (g/100ml)
			a値	a/b値		
2005年	表層摘果	9.8	15.3	0.41	11.1	0.80
	慣行摘果	9.5	14.8	0.40	10.9	0.81
2006年	表層摘果	10.0	16.5	0.43	11.8	0.96
	慣行摘果	10.0	16.9	0.45	11.8	0.94

注1) 2005年は11月14日収穫、18日着色、果皮色調査、23日果実分析
2006年は11月13日収穫、15日着色、果皮色調査、20日果実分析